

警戒レベル常

いのちを守る

検証 西日本豪雨

提言 ②

一方、「レベル3 避難準備・高齢者等避難開始」を出した別の4市町を含め、計8市町で避難の対象になった計約46万人のうち、避難所に身を寄せたのはわずか775人(0.17%)。知人宅や勤務先などに逃げた人も

いる。避難所に身を寄せた人の割合は目安とはいえず、導入の効果は見えにくい。6割強が警戒レベルを「分かりやすい」とした一方、「自分の意識や行動に変化がない」と思っている人も6割強。県立広島大

（広島市南区）が11、12日、県内で実施した意識調査の結果が住民の評価を端的に示す。

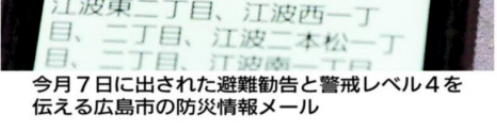
避難勧告、避難指示、大雨警報、土砂災害警戒情報。激しい雨が降ると、避難や気象に関する大量の情報で住民に押し寄せる。複雑で分りにくい。情報の理解不足が西日本豪雨での被害拡大の一因だった。

弱者に届かない これらの情報を危険度別に5段階で整理したのが警戒

レベルだ。政府の狙い通り、シンプルになった。ただ、最も早く伝えなければならぬお年寄りたち「災害弱者」に情報が届きにくいという課題は残されたままだ。

広島市は7日、全8区のうち5区内で、お年寄りたち避難を呼び掛けるレベル3を出した。情報は市の防災情報メール登録者に流れる。だが、レベル4のように携帯電話やスマートフォンは強制的に鳴らない。メール登録件数は11万76

00件。人口の1割にも満たない。お年寄り全員に情報は瞬時に伝わらない。取材班はこの日、坂町の避難所で山田晃さん(88)、敏子さん(85)夫妻に会った。2人とも移動につえが欠かせない。民生委員の声掛けに、当初は避難するのを断った山田さんは明かした。「レベルとか言われてもよく分からない。人に迷惑を掛けてまで逃げたくない」と思っていた



大雨・洪水警戒レベル 5段階の警戒レベルで避難に関する情報と住民が取るべき行動を示す。警報級の大雨などの可能性があるとき気象庁が発表した場合レベル1。注意報が出されるとレベル2。これまでの避難準備・高齢者等避難開始はレベル3。避難勧告と避難指示(緊急)はレベル4で全員が避難する。レベル5は既に災害が起きている状況を含み、住民は命を守る最善の行動を取るとする。西日本豪雨を踏まえ、気象庁が5月20日に運用開始。避難指示・勧告を出す市町村も運用を順次始めている。

国や自治体は警戒レベルについて、さらに周知を徹底しなければならぬ。被災地で避難率が0.17%にとどまった要因は何か。今後にも常に制度を検証し、改善していく必要がある。一方では、押し寄せる情報の波から命に関わるものを的確につかむ力を磨きたい。警戒レベルの浸透と住民の力がかみ合う時が「早めの避難」実現の出発点になる。(災害取材班)

(C) 中国新聞社 無断転載、複製及び頒布は禁止します。